土になる禅―鈴木正三に学ぶ―　臨済宗円覚寺派管長　花園大学総長　横田南嶺

鈴木正三年譜

天正七年一五七九

三河国賀茂郡足助(現在の愛知県東加茂郡足助町)に生まれる。父は鈴木重次、母は栗生筑前守永旨の娘。この年愚堂生まれる。

四歳　同年の子供の死に会い、のち長く死についての疑問が続く。織田信長死す。

十七歳　『宝物集』を読み感動。真理追求のためには身命をも惜しまぬ気持ちを起こしたという。

二十二歳　本多佐渡守の部下として信州で戦う(関ヶ原の戦い)。

二十九歳　実子・重辰誕生。

三十六歳　父・重次、弟・重成、重之とともに、本多出雲守の部下として大坂冬の陣に参加。冬、岡崎に帰る。

三十七歳　大坂夏の陣に参加。のち二百石を賜る。江戸詰となり駿河台に住む。この頃、貴雲院に万安を訪ね、曹洞宗の禅について語り合う。また、南泉寺第一世・大愚に参禅。

四十二歳　江戸にて出家。重辰、重成の養子となり、猶子・重長が家督を継ぐ。重次、則定に閑居。

四十三歳　旅に出、広く名僧知識を訪ね、また畿内の神社仏閣に参拝。

四十四歳　雪窓、玄俊とともに大和法隆寺で経律を学ぶ。玄俊より沙弥戒を受ける。

四十五歳　三河国千鳥山に入り工夫に凝る。荒行のために発病。弟・重成のすすめにより、戒律を捨て肉食。

四十六歳　三河国石平山に草庵を結び、坐禅弁道に努める。多くの僧俗男女来訪し聞法。

五十四歳　三河国石の平に仏殿を建て石平山恩真寺と名づける。のち吉野山に登り、翅出の行者を見てその捨身の行に感激。

五十九歳　天草の乱に重成・重辰出陣。

六十一歳　八月二十八日の暁、廓然として開悟。二井寺を再建。

六十四歳　天草に行き、三十二の寺院を建立。『破吉利支丹』を書き、各寺に納める。三年間滞在。
七十歳　江戸に出る。教義の研究に努め、また多くの人を教化。
七十四歳　熊谷氏の作った牛込天徳院境内、了心庵に移る。『修行之念願』を書き『万民徳用』を完成。
七十五歳　弟・重成、駿河台の自邸で自刃。
七十六歳　大強精進勇猛仏に随喜。この年万安、　遷化。隠元、渡来。
七十七歳　春、病を得、了心庵を返し駿河台の重之邸に移る。六月二十五日午後四時頃、　示寂。

『驢鞍橋』より

一　師一日示曰、近年仏法に勇猛堅固の大威勢有ると言事を唱ゑ失へり。只柔和に成り、殊勝に成り、無欲に成り、人能くはなれども、怨霊と成る様の機を修し出す人無し、何れも勇猛心を修し出し、仏法の怨霊と成べしと也。

二　一日示曰、仏道修行は、仏像を手本にして修すべし。仏像と云は、初心の人、如来像に眼を著て、如来座禅は及べからず、只二王不動の像等に眼を著て、二王坐禅を作すべし。先二王は仏法の入口、不動は仏の始と覚ゑたり。
然ればこそ、二王は門に立、不動は十三仏の始めに在ます。彼の機を受ずんば煩悩に負べし。只一頭（ず）に強き心を用るの外なし。然るに今時、仏法廃果て、すべ悪く成て、活た機を用る者なし。皆死漢計り也。仏道には、活漢とて、活た機を用る事。是を知ず殊勝に成、柔和に成り、沈み入て仏法と思ゑり。或は悟りたる等と、さもなき事を鼻に上、狂ひありく者多し。只我は殊勝げな事をも、悟りげな事をも知ず、十二時中、浮心を以て、万事に勝事計用也。何れも二王不動の堅固の機を受、修し行じて、悪業煩悩を滅すべしと、自ら眼をすへ、拳を握り、歯ぎしりして曰、きつと張懸て守る時、何にても面を出す者なし。始終此の勇猛の機一つを以て修行は成就する也。別に入事無し。何たる行業も、ぬけがらに成てせば用に立べからず。強く眼を著て、禅定の機を修し出すべしと。

（浮かぶ心の種類がある。仏や神を敬う心・主人の前に坐っている時の心・礼儀正しい出会いの時の心・慈悲あり正しくすなおな心・仁義を守る心・自己の本分を守る心・生と死をよく見極める心・戦陣にのぞむ心・身を捨てて仏道に励む心・無常を観ずる心・念仏を唱える心・経典や真言陀羅尼を誦する心・仏陀の教説や祖師の言葉に注目し究明する心・公案を工夫し、聖胎を長養し、坐禅する心・すべて悟りを得るために実践修行に励む心、これが浮かぶ心であって、これはあらゆる苦に勝つ坐禅、すなわち身心を滅却して安楽を生ずる安楽の法門である。）

果たし眼『驢鞍橋』巻上九十七

一日示曰、我平生果し眼に成、八幡と云てねぢまわし、じりじりと懸る機に成て居る。 我法はげにと出家には移り難かるべし。 只武士に移るべき也。其故は、我少しも殊勝気なし。只常住ねぢまわして居る機一つを用ひ得る計り也。我法はらつは仏法と也。

ときの声『驢鞍橋』巻下百十

「一日去処にて示日、仏法と云は万事に使ふ事也。殊に武士は鯢波坐禅を用べしと云て、自ら観波を作給。其座に不三有、ひしと此機を受。師、後に其意を聞て肯之。」

『驢鞍橋』巻上　百七　一日、去る侍に示して曰く、始めより忙敷中にて坐禅を仕習ふたるが好き。殊に侍は鯨波の中に用ふる坐禅を仕習はで不叶。鉄砲をばたぱたと打立て、互に鎗先を揃へて、わつわつと云うて乱れ逢ふ中にて、急度用ひて爰で使ふ事也。なにと静なる処を好む坐禅が、加様の処にて使はれんや。総じて侍はなにと好き仏法なりと云ふとも、ときの声の内にて用に立たぬ事ならば、捨たがよき也。然る間常住二王心を守習ふ外なし。

『驢鞍橋』巻下百三十一

師始室を閉といへども、末後両三日に至て、諸人の見舞を致ことを許給。時に、一僧猶法要を示給ゑと云。師、はったと瞋（にら）んで曰、何と云ぞ。 我三十年

云ことを、えうけずして、左様のことを云か。正三は死ぬと也。其後法要を問者なし。時に明暦元年乙未六月二十五日、申の刻、安然として遷化し給也。

『近世日本の批判的精神　中村元選集第七巻』第一編「鈴木正三の宗教改革精神」

「従来、日本の多くの仏教者は、世間を離脱して、山林のうちに隠棲して、禅定を修するとか、あるいは念仏読経に専心するとかいうことが、仏道修行であると考える傾向が強かった。たとい都市にいても、寺院のうちに居住して、世俗的な生活から離れ遠ざかっていることが、僧侶の本分であるとされる傾きがあった。一般の在俗信者は世俗的な職業を追求してはいたが、なお世俗生活と信仰生活とは別のものであると考えていた。ところが鈴木正三は、従来のこうした見解に反対して、世俗的な生活のうちに仏道修行を実現しようとする。

『仏法修行は、諸の業障を滅尽して、一切の苦を去る、此の心即ち士農工商の上に用ひて、身心安楽の宝なり』といい、また『仏法は渡世身過に使ふ宝也』と教える。かれによれば、いかなる職業でも仏道修行であり、万民すべてそれによって仏となることができるのである。

『何の事業も、皆仏行なり。人々の所作の上におひて、成仏したまふべし。仏行の外なる作業有るべからず。一切の所作、皆以て世界のためとなる事を以てしるべし。仏体をうけ、仏性そなはりたる人間、意得あしくして、好て悪道に入ることなかれ。』かれによると、いかなる職業も絶対者の顕現なのである。絶対者である唯一の究極の仏の顕現であるという点において、いかなる職業も神聖であるということになる。」

『驢鞍橋』巻上　九十八　師、壬辰八月日、武州鳩谷宝勝禅寺に至る、時に近里の百姓等数十人来、法要を問。師示曰、農業 便ち仏行也。別に用心を求べからず、各々も躰は是仏躰、心は是仏心、業は是仏業也。然れども、心向の一つ悪敷故に、善根を乍作、還 地獄に入らるる也。或は憎ひ愛ひ樫ひ貪ひ抔と、様々私に悪心を作出し、今生日夜苦み、未来は永劫悪道に堕するは、口惜事に非ずや。然間、農業を以て業障を尽すべしと大願力を起し、一鍬一鍬に南無阿弥陀仏と耕作せば、

必ず仏果に至るべし。只天道に万事任せ奉り、正直を守て、私の欲をかわくべからず。然らば天道の恵みにて、今世後世ともによかるべし。

土になる　死に習う『驢鞍橋』巻上十

一日、去遁世者来て、修行の用心を問、師示曰、万事を打置て、唯死に習わるべし。常に死習つて死の隙を明、誠に死する時、驚ぬやうにすべし。人を度し、理を分る時こそ智恵は入れ、我成仏の為には、何も知たるは怨也。只土に成て、念仏を以て死習わるべし。

鈴木大拙『日本的霊性』

「これは幾千鍬を重ねることによって業障を尽くし得るという義ではないのである。南無阿弥陀仏の一鍬ごとに幾百千劫の業障が消えていくのである。鍬の数、念仏の数で業障をどうしよう、こうしようというのではないのである。振り上げる一鍬、振り下ろす一鍬が絶対である、弥陀の本願そのものに通じていくのである、否、本願そのものなのである。本願の「静かな、ささやかな声」は、鍬の一上一下に聞えるのである。」

「農民にとって大地は、単なる象徴ではなかった、大地は彼らにとって、生活の最も具体的な基体であった。起きるのも大地の上、倒れるのも大地の上である、人間の心にとってこれほど究極的な安心の場はない。更にまた大地は、いかなる不浄をも黙って受入れ、しかもその汚穢を清浄にして返す、人間にとってこれほど寛容で有難い存在はない。こうして農民の心は大地のまことを体認する、まことはまた宗教の本質である、農民の心が宗教の大地性を感得するのは、当然と言わねばならぬ。これに反して平安時代の大宮人は、大地から遊離していた、大地のいかなるものであるかを知らなかった。霊性が彼のうちに眼醒めなかったのはこの故である。」